

---

# あの日、あの時、あの場所に...

夕陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの日、あの時、あの場所に…

### 【Nコード】

N3930Y

### 【作者名】

夕陽

### 【あらすじ】

藍染との戦いから約半年。

一護の霊力は消え、ルキアがやってきた。

一護の記憶を封印しに来た。

と。

そしてある日、一護のもとに一人の少女が現れた。

一護を連れ去る少女。

尸魂界、現世の人々に伝わる。

『一護が蒸発した』と。

駆け回る疑問。広がる波紋。

少女とはだれか？

一護はなぜ連れ去られたのか？

遊子・夏梨の力の開花。

少女の正体。

明かされる事実。

一護の力。

全ての謎が解き明かされるとき。

全ての謎がつながる。

## 巻 封印（前書き）

夕陽です。

もう一つ小説を投稿してしまいました。

初めての方は、上の分の意味、わからないかも知れませんが。

あの日、あの時、あの場所に…をよろしく願います。

更新は、約二日に一回です。

## 巻 封印

『立ち入り禁止！！絶対入るな！！』

人が誰も寄り付かない洞窟の中で彼女は生まれた。

彼女を此の世に生み出したのは、『那井寺聡樹<sup>なゐじ そうじゆ</sup>』

彼女は、彼の『鬼道』というもので生み出されたのだ。

細身の体に、黒く長い髪の毛。

何もまっとうしていない彼女は、彼に問うた。

「あたしは、誰？」

と。彼は答えた。

「お前は、私が生み出したものだ。私だけの言うことを聞けばいい。私が命令したことを実行すればいい。お前は感情を持たぬ兵器なのだから。」

と。

「お前の名前は、カンナだ。良く覚えとけ。お前の名は、紺平馬<sup>こんへいば</sup>カンナだ。」

彼女、否カンナはエメナルドグリーンの瞳で聡樹見つめた。

「あたしは、何をすればいい。」

「さっき言っただろ。お前は私の命令さえ聞いていれればいいのだ。」

お前に…『黒崎一護』の拉致を命ずる。」

「…。はい。」

「いいか。お前は私の兵器だ。感情は持たない。」

「はい。」

「絶対に忘れるな。」

\*\*\*\*\*

クロサキ医院

一階

藍染の戦いから約半年の月日が流れた。

今の一護に霊力はない。

反対に霊力が上がってきているのは遊子と夏梨。

特に夏梨だ。

\*\*\*\*\*

一護の霊力がなくなってから約一週間。

ルキアが黒崎家宅に現れた。

ルキアの姿が見えるのは遊子、夏梨、一心の三人だけだった。

ルキアの要件は

一護の記憶を封印しに来た。

何で…。

この言葉を聞いたとき黒崎家の人々は驚いた。

何で一兄の記憶を消すのさ。ルキ姉。

一護を…。死神という呪縛から逃すためだ。

呪縛？なにそれ。

一護は死神の力を失ってからどうなった。

そ、そりゃあ。

言えぬだろ。それほど一護は自分の力でみなを助ける  
ことが出来ぬことを、恨めしく思っている。

でも、それが一護の記憶を消すことにはつながらんねえ  
だろ。ルキアちゃん。

いえ。一護は今霊力を失っている。当然死神の力も霊虚を見ることがすらできぬ状態だ。

そうだな。

でも、それだけじゃ。

確かにこれだけなら一護の記憶を封印する意味がないだろう。

……。一護の霊力は完全にはなくなっていない。浦原がそうほざいていた。

それって……。どういう…。

つまり、一護の霊力はまたいつか元に戻る時が来るんだ。

ほんとに…？

ああ。一護の霊力が戻ればまた虚に襲われるだろうし、霊と、触れたりしゃべったりすることが可能になるだろう。

そういうことになるな。

そしてその時。一護が虚に襲われれば。私たち死神と否が応ともあつてしまつたろう。

そう語るルキアの顔は、何とも言えない複雑な表情だった。



…。

そしてその時。封印を解く。一護が霊力を取り戻して我々死神や虚の存在に気付いたとき。私が一護にすべてを打ち明ける。

…。織姫ちゃんとかはどうするの？ルキアちゃん。

あいつらの記憶も消しとく。ついでに、記憶を少々いじる。井上や茶渡の力のことを。石田は記憶のみだ。あと、たつきたちにも記憶の封印は施す。そしてみんな霊力を持っているのは生まれながらの体質という風に錯覚させる。

…。わ、私たちは？

してほしいならしてやる。お前らは本当に先の戦いでは関わり合いにならなかったからな。

あたしには何もしないでルキ姉。みんな忘れているものを自分たちだけ覚えてるの耐えられないけど。もし一兄が記憶を取り戻したとき。あたしたちが言っただけでいいんだ。大丈夫って。安心していいって。一兄が死神に戻りたいんなら、戻っていいよって。

私も！夏梨ちゃんと同じ意見です。

分かった。だが、お前らの霊力を少々抑える。特に夏梨。お前の霊力をな。封印するわけではない。少し抑えるんだ。抑えが効かなくなってきたら一心殿に聞け。お前をある所へ連れて行ってくれる。

夏梨たちの強い意志に励まされたのか。ルキアが少し元気を出した  
感じで話し出した。

ある、ところ？…。あたしの霊力を抑えてくれるのは  
いいけど。本当に封印しない？

ああ。斬魄刀にかけて誓う。

死神にとって斬魄刀とは、命と自分と同じ存在。

それを知ってか知らぬか。夏梨は答えた。

なら、いいよ。一兄にも今すぐ、封印をするんでしょ？

まあな。今の一護に霊力はないから私の姿を見ること  
さえできぬであろう。封印をしたら少しの間一護が気を失うが  
いいか？

いいよ、そんなこと。

そうか。では、行ってくる。

そして一護の記憶、その他の人々の記憶をすべて消した。

そして、半年の月日が流れたクロサキ医院はいつも通りの朝を迎え  
ようとしていた。

\*\*\*\*\*

一護は朝の日課として、そこから辺をぶらりと散歩していた。

この道を歩くと、何かを思い出しそうで思い出せない。

一護はルキアとともに訓練した公園の前に来ていた。

そして、母・真咲が死した川原。

一年くらい前だったら、一護は母が死んだことを責めていた。

そのことは一護も覚えている。

そこからだ。

何かノイズがかかったように。一人の少女が何かを言っている。

だが声は聞こえない。

少女の顔もよく見えない。

俺は、この言葉を聞いて自分を責めなくなったのか？

こいつは誰だ？

そんなことを考えながら一護は自分の家に戻った。

そして玄関の戸を開けようとしたとき、何か黒いものが目に留まった。

な、んだ。これ。

どこか、懐かしくて。

でも何かを忘れている。

黒い服をまとった少女は言った。

「黒崎一護ですか？」

急に名前を聞かれた一護は、戸惑いを覚えながら答えた。

「ああ。」

「しばらく眠ってもらいます。」

ドン

少女は、一護の首筋を思いっきり殴った。

一護は気を失った。

## 巻 封印（後書き）

どうでしたか？

なんかあらずじと全然違うじゃん！！  
なんて思った方々。

もう少し待ってみてください！！  
多分あらずじと同じようになるはずです。

少女の正体、わかりますか？

話の冒頭に出てきたあいつですよ。あいつ。

誤文字などの指摘お待ちしています。  
感想は、「チツ。しょうがねーな。」  
程度でいいです。

これからもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3930y/>

---

あの日、あの時、あの場所に...

2011年11月10日08時12分発行